

ゴルフ部

澤 真太郎

千葉大学医学部135周年記念誌のご発刊、誠にありがとうございます。

このような場で、学生である私たちが筆をとらせていただくことは誠に恐縮ではございますが、謹んで千葉大学医学部ゴルフ部の創設時や、現在の活動についてしたためさせていただきたいと思います。

私たちの所属する千葉大学医学部ゴルフ部は、1983年（昭和58年）に創設され、今年で26年目を迎えます。保元明彦先生（昭和60年卒）や古口徳雄先生（昭和60年卒）らが中心となってくださり、当時の第二外科教授であられた佐藤博先生（故）を部長としてお迎えし、発足しました。

この記念誌の原稿を書くにあたり、当時の部誌を資料として拝見いたしました。大会や合宿などにおける様子を垣間見たり、部活動という団体を運営する悩みや苦労などが書かれているのを読んだり、私たちとあまり変わらない当時の先生方を知ることができ、更なる親近感を抱くことができました。また、歴代の部長や顧問の先生方、部員だった先生方が「同好会ではなく、学生の部活動としてのゴルフ部のあるべき姿」について語っておられることに感銘をうけ、「打ったら走る」「キャディバッグは担ぐ」「キャディバイトをしてラウンドをさせてもらう」などを、現在でも部活動全体の指針として維持できていることを誇りに思っております。

現在、ゴルフ部は総勢65名となり、四代目部長であられる織田成人救急集中治療部教授のもと、全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦と東日本医科学生総合体育大会の3大会に加え、医科歯科杯や五校戦などの交流戦で他大学と競い合い、交流し合い、仲良く楽しくかつ真剣に活動に励んでいます。その他にも、東医体打ち上げ旅行での部内コンペや卒業生との追い出しコンペなどのほかにも自主的に小規模コンペを行い、また春・秋のOBコンペではOB・OGの先生方とも交流を重ねております。

普段の活動と致しましては週2回の正規練習のほかに、土日のキャディバイト後の練習ラウンド、そして二代目部長であられた山口豊肺外科教授（故）の御助力で練習場として使用できるようになった弓道部道場の隣にある敷地に、三代目部長であられた

平澤博之救急集中治療医学名誉教授がネットや打席等を整備してくださったアプローチ練習場で各人がアプローチ練習を行っております。

歴代部長の先生方や、これまでの先輩の先生方が整えてくださった環境における日々の努力が実を結び、近年では、全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦において男子部がAリーグ昇格・維持（2007、2008年）、東日本医科学生総合体育大会において女子部が優勝（2007年）と、華々しい成績を修めることができました。

ここで、活動報告として上に述べたAリーグ昇格・維持や東医体について少し振り返らせていただきたいと思います。

まずは、男子部が果たした全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦Aリーグ昇格・維持に関してのエピソードですが、その前に医学部ゴルフ部の大会やリーグ戦の仕組みを簡単にご紹介します。

医学部ゴルフ部の大会は、大きく分けて東日本医科学生総合体育大会と全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦（関東・信州）の二つがあります。これらの中で、全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦の男子部のみ、通年の成績で各大学の順位を競う仕組みになっています。

リーグ戦は上位からAリーグ（7校）、Bリーグ（8校）、Cリーグ（6校）と分かれていて、十数年前からつい二年前まで、千葉大学はBリーグに属しておりました。しかも、その頃は現在に比べて部員数も遥かに少なく、再びAリーグへ昇格することはなかなか難しいと考えられていたそうです。

しかしながら、ここ数年で部員数が急速に増えたことも重なり、当時の6年生を筆頭に皆で一丸となって練習に打ち込む中で力をつけ、2007年春リーグにおいて、同年の秋リーグにおけるAリーグ昇格を賭けた入れ替え戦を視野に入れることのできる好成績を修めることができました。春リーグ後は、秋リーグでの入れ替え戦を目標に更なる練習に励み、どの学年もバランスよく実力をつけていきました。特に、当時の6年生の先輩方は勉強の時間以外ほとんどゴルフに裂いていたと言っても過言ではないくらい全力で練習していたために非常に強く、この

第5章 交友の広がり

機会を逃しては、しばらくAリーグには昇格できるチャンスはないのではないかとと思われるほど完成されたメンバーで秋リーグに参戦し、念願のAリーグ昇格を賭けた入れ替え戦に臨むことができました。

入れ替え戦には当時の2年生から6年生までの5人の選手が出場し、危うく棄権になりそうな選手がでるなどのトラブルを越えて、悲願のAリーグ昇格を果たしました。

Aリーグ昇格が決まってすぐ、試合会場の外で円陣を組んで行ったミーティングでは、選手や卒業学年の先輩方が各々、これまでの想いやこれからについての考えを語りましたが、特に6年生の先輩方は、数年にわたり部活全体を背負って頑張ってきただけに感慨もひとしおだったようで、涙をこらえられないほど嬉しい様子でした。

さて、それから一年後。前年に千葉大学をAリーグに昇格させた立役者である先輩方が卒業され、さらに今度は強豪校のひしめくAリーグであるが故に、2008年春リーグにおいてはAリーグ内で最下位という結果になってしまいました。危機に瀕し、更なる練習に励んだものの、秋リーグの結果だけでは順位を変えることができずにBリーグ上位2校との入れ替え戦に引っかかることとなってしまいました。

状況は芳しくありませんでした。選手たちの調子はあまり良くなく、このままでは先輩方が全力を尽くし、悲願のAリーグ昇格を果たしてわずか一年でBリーグに落ちてしまうのではないかと不安が皆に募る中、入れ替え戦に臨みました。

選手各々が午前中の戦いを終え、試合の半分が過ぎた休憩時間のことです。部内トップの実力を持つ当時の主将がイスに座っているのが見かけられましたが、かなり沈んでいる様子でした。あとで聞いた話によると、そのときあまり良くないスコアで前半を折り返してきた主将は「一番いいスコアを出さなくてはいけない自分が、こんなスコアを出しているわけにはいかない。このままではBリーグに落ちてしまう。後半はとにかく挽回しなければ。」といったことを考え、焦っていたそうです。言い換えれば「一人で戦っていた」といってもいいかもしれません。

ゴルフの団体戦というのは、5人の選手がそれぞれ別の組でラウンドをし、最終的に全員の合計スコアを大学ごとに競うという仕組みになっています。選手のうち一人が良くても他の人が悪ければ戦うことが難しく、逆を言えば突出した人がいなくても全員がそれなりにまとまっていれば勝負できるという

面白い一面を持っています。

そんな中、一人で焦っている主将に、選手の一人が「“みんなで” 後半も頑張って、Aリーグに残留しましょう！」と声をかけたそうです。その一言に主将は、自分が絶対に良いスコアを出さなければBリーグに落ちてしまうという猛烈なプレッシャーから開放され、「もし全力を尽くした結果として自分のスコアが悪くても、他の選手がいいスコアをだしてくれば大丈夫だ。」と思うことができ、リラックスして戦えたという後半は、とても良いスコアで帰ってきました。

結果として、主将はもちろんのこと、その他の選手も普段より良いスコアでまわってくることが出来、無事Aリーグ残留を果たしました。

ここで特筆すべきは他の選手への「信頼」です。「ゴルフは個人競技だ」とよく言われますし、実際に試合中はとても孤独です。同じ大学のキャディーが付いてくれているので二人で試合に臨みますが、他の競技と違い、試合中に選手同士声を掛け合うことや、選手以外の部員からの声援を得ることができないのは辛いところがあります。しかし、「一人で戦っているのではなく、皆で頑張っているのだ」、「だからこそ自分自身が今のコンディションで最高のプレーができれば、それで大丈夫なはずだ。」と選手同士だけでなく部員一人一人が信頼しあうことで各々の気持ちの負担が軽くなり、良いコンディションで自分のベストを尽くすことが勝利につながっていくのだと思います。

また、このような男子部の活躍に負けじと女子部も練習に励み、2007年東日本医科学学生総合体育大会においては、強豪校である慶応大学や聖マリアンナ医科大学を抑えての優勝、2009年新人戦においては現在2年生である木下が個人優勝を果たすなど、種々の成績を修めております。

現在は、再びAリーグ残留をかけた秋リーグを控え、正規練習のほかに合宿や自主練習なども加えて練習に励んでおります。

部員数が増加し、成績も残せるようになった現在ではありますが、それを維持し更に発展を遂げるためには「運動部として、強くあること」と「部員同士の結束力があること」が必要不可欠です。そしてこれらは相関し合って成り立つものであり、その成立のためには、責任を負う仕事をしたり、時には自分の時間や労力を犠牲にしたりという努力や我慢といったものを各々が積み重ねていかなければならず、また、部活動とは社会生活に必要なそれらの事

柄を学ぶべき場であると考えております。

今こうした成績を修めることができ、楽しく部員との絆を感じながら活動することができるのも、ゴルフ部と言う部活を作り、維持し、支えてきてくだ

さった先生方や先輩方のおかげです。私たちもそれを受け継ぎ、これからのゴルフ部が更に発展するよう尽力することを誓って結びの言葉とさせていただきます。乱文失礼いたしました。

(さわ しんたろう)